

大田区立山王草堂記念館版 記念館ノート

第9号

発行：2025年3月31日
編集：大田区立籠子記念館



1926（大正15）年6月3日、渋沢栄一邸にて 学校法人国士館所蔵画像

国士館の完成を記念して、写真前列右から徳富蘇峰（63）、渋沢栄一（86）らが集った一枚。蘇峰ゆかりの同志社設立の際は、渋沢が積極的に支援した。



1891年、58歳頃の福沢諭吉
（国立国会図書館「近代日本人の肖像」より）

註
末木孝典「福沢諭吉を巡る人々」（『三田評論』慶應義塾大学出版 二〇二〇年）

◆徳富蘇峰と福沢諭吉のエピソード
慶應義塾の創立者として知られる教育家・福沢諭吉（一八三五～一九〇一）とジャーナリスト・徳富蘇峰（一八六三～一九五七）には、言葉を変えたエピソードがあります。一八八二（明治十五）年の夏、上京した蘇峰は、慶應義塾塾生・江口高邦（蘇峰の従兄）の紹介で諭吉と対面しました。当時十九歳の蘇峰は「平民主義（国家の発展には民を重んじる考え）」を信条としており、「官民調和論（国家の発展には、官と民の調和が必要とする考え）」を唱えていた四十七才の諭吉に疑問を呈します。そして、諭吉は蘇峰に読書を積み重ね、様々な経験をすするうちに「今は分からないだろうが）追って判る」と答えました（註）。その後は、蘇峰と諭吉の交流はなく、この機会が唯一の対話となりました。しかし、一八八八（明治二十一年）三月、蘇峰は「教育で天下の英才を得て之を教育し、山高く水長く、感化を天下に及ぼす者」（『新日本の二先生』『国民之友』）と諭吉を称賛し、交流がなくとも、蘇峰が評価していたことが窺えるエピソードとなっています。

館のトピック

2025年度の予定

1. 馬込文士の足跡をたずねて散策会

尾崎士郎記念館などの文化施設と連携し、当館をはじめ、馬込文士のゆかりの場所を散策します。

○「大森山王の政財界人～徳富蘇峰と渋沢栄一を中心に～」

5月11日（日） 10:00～、14:00～

2. 2館ギャラリートークのご案内

○以下の日程で尾崎士郎記念館と合同でギャラリートークを行います。

毎月第1土曜日（2026年1月のみ第2土曜日）

各日 11:00～、13:00～ 2館合わせて1時間ほど

開始時間まで山王草堂記念館にお集まり下さい。

※日程等は変更されることがあります。予めご了承ください。

館の基本情報

大田区立山王草堂記念館

〒143-0023 大田区山王 1-41-21

TEL 03-3778-1039

URL <https://www.ota-bunka.or.jp/sanno/>

《アクセス》

① JR大森駅より東急バス「上池上循環内回り」「新代田駅前」行

② 都営浅草線馬込駅より東急バス「上池上循環外回り」「大森操車場」行

いずれも「山王二丁目」下車、徒歩約5分

③ JR大森駅西口より徒歩約15分

《入館案内》

●開館時間 9:00～16:30（入館は16:00まで）

●入館料無料 ●休館日 年末年始、臨時休館

〈エッセイ〉 徳富蘇峰が語る 福沢諭吉と渋沢栄一

大田区立山王草堂記念館 学芸員 黒崎 力弥

二〇二四（令和六）年七月、日本銀行券が改刷されました。一万円札が改刷されたのは、四十年ぶりとなり、教育家・福沢諭吉（一八三五〜一九〇一）から実業家・渋沢栄一（一八四〇〜一九三二）に変わりました。一万円札の肖像が印象的な二人ですが、江戸幕末期では鬚を結って帯刀した志士（高い志を持ち、国家や社会のために献身する人。主に幕末期に活躍した人）でした。そして、ジャーナリスト・徳富蘇峰（一八六三〜一九五七）は二人と実際に会い、幕末明治期を主題とした『近世日本国民史』などにおいて高く評価しています。今回は、蘇峰から見た諭吉と栄一について紹介します。

蘇峰から見た福沢諭吉

徳富蘇峰は、福沢諭吉を英文翻訳の第一人者とみなしていました。諭吉は独学で英学を修め、一八六〇（安政七）年、幕臣・勝海舟（一八二三〜一八九九）が艦長を務めた咸臨丸で渡米を果たします。帰国後、渡米の実績を買われた諭吉は、江戸幕府の翻訳方として雇われ、通訳のほか翻訳家として活躍しました。もともと、漢学や蘭学を修めていたほか、読書家であったことから、語彙が豊富であったため、西洋の言葉や思想を日本語化するのに努めました（註）。そして、蘇峰はこの頃の諭吉を「彼の重なる働きは、概して明治の上半期であるが、然も幕末に於いてもまた彼の国民の思想及び生活に及ぼしたる影響は、あらゆる学者に比して、昭著（際立って明らか）なるものがあつた」（第十七章 文化上における福沢諭吉の寄与「近世日本国民史」六一 孝明天皇御宇終篇「明治書院、一九三九年」と評価しました。また、蘇峰は諭吉を優秀な後進を育てる教育家と見なしています。幕末時には慶應義塾を開講し、明治期になると、諭吉は教育家として頭角を現しました。代表作『学問のすゝめ』は、一八七二（明治五）年二月から一八七六（明治九）年十一月にかけて全十七編発行され、一八八〇（明治十三）年七月に一卷にまとめられました。累計発行部数は三百四十万部ほどで、明治初期の日本の人口が三千四百万弱であったことを考えると十人に一人が手に取ったベストセラーでした。後に蘇峰が「当

時の進歩者（新しく優れたものを積極的に取り入れた人）で、福沢ファンでなかったものはほとんど無かつた」（『慶應義塾に赴かず、官学最初の門戸を出づ』『我が交遊録』中央公論社、一九三八年）と述べたように当時の知識人の中では、諭吉の人氣が高かつたのです。今回のトピックスで紹介したように、蘇峰は諭吉を教育家として「感化を天下に及ぼす者、果たして焉（いず）くにある（反語。果たして存在したのだろうか。いや、存在しない）。だが、吾人は今指を屈して二個の先生を得たり、一を福沢諭吉君といひ、他を新島襄君といふ」（『新日本の二先生 福沢諭吉君と新島襄君』『国民之友』民友社、一八八八年）と自分の師であつた教育家・新島襄（一八四三〜一八九〇）と並べ称えました。

蘇峰から見た渋沢栄一

また、徳富蘇峰は、渋沢栄一を思慮分別のある人とみなしていました。渋沢栄一は名字帯刀が許された豪農で、一八六一（文久元）年の春、江戸遊学の際に栄一は、北辰一刀流千葉道場（坂本龍馬ら幕末期を代表する志士が入門）に通いました。この頃の志士には、「攘夷（外国人を受け入れないこと）」思想が主流となつており、千葉道場の門下の多くが攘夷を信条とし、栄一も感化されました。一八六三（文久三）年には、栄一の従兄であり、学問の師であつた実業家・尾高惇忠（一八三〇〜一九〇一）と栄一が中心となつて横浜港焼き討ちによる攘夷運動を計画しましたが、決行は困難として思いとどまります。翌年には遊学時からの縁で一橋徳川家に誘われ、幕臣の一人として活躍しました。後に蘇峰が栄一の健全な判断を「武蔵士豪の攘夷的壮士であつたが、その壮士時代から、豊裕なる常識の持ち主であり、この常識が歳と共に発達し、常識が渋沢か、渋沢が常識かと疑わしむる程であつた」（『渋沢栄一翁について』『人物景観』民友社、一九三九年）と評価しました。さらに、蘇峰は栄一を民間主導の実業家とみなしていました。一八七三（明治六）年、大蔵省を最後に栄一は明治新政府から去り、大蔵省時代から計画していた第一国立銀行（現・みずほ銀行）を設立したほか、同時期に計画していた抄紙会社（現・王子ホールディングス）を設立しました。後に蘇峰は、栄一を「彼は到底藩閥旺盛の（明治新政府）官界では、その頭地を出す（こと）の困難なるを見、寧ろ官界の牛後（最下位）とならんよりは、民間に於いて鶏口（最高位）たるに若かず（なつた方がよい）と考慮していたらしい。これを潮合いに、彼は一世民間人として、その独自一己の天地を開拓した」（『井上・渋沢の辞職と建議』『近世日本国民史八四内

政外交篇』時事通信社、一九六〇年）と評価しました。栄一は世を去るまで約五百もの企業に携わり、約六百の公共事業・教育機関の支援に尽力しました。年が親子ほど離れながらも、蘇峰と栄一の間には交流があり、一八八八（明治二十）年の同志社大学設立時には、蘇峰が窓口となり、栄一が個人としては最高額の六千円を寄付したことをはじめ、今回のとつておきの一枚で紹介したように、国士館大学維持委員の中心として教育機関を支援しました。

徳富蘇峰の信条は、官僚よりも民間主導による国家の繁栄を第一としていました。このことから、福沢諭吉と渋沢栄一が在野の人となり、率先して国家の近代化を進めたことに対して、蘇峰は二人を高く評価したと思われまふ。

註

当時の日本には存在しなかつた文化を和製漢語で翻訳した。例えば、壇上で聴衆に考えを述べる「speech」を「演じるように説くこと↓演説」とした。



左から一八六〇年頃、二十代前半の渋沢栄一と二十代後半の福沢諭吉。栄一は農家、諭吉は下級士族の出ながらも日本の近代化に欠かせない人物となつた。（国立国会図書館「近代日本人の肖像」より）